

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



写真1 ベルギー ボッホ・フレール社



写真2 イングランド ドーソン社

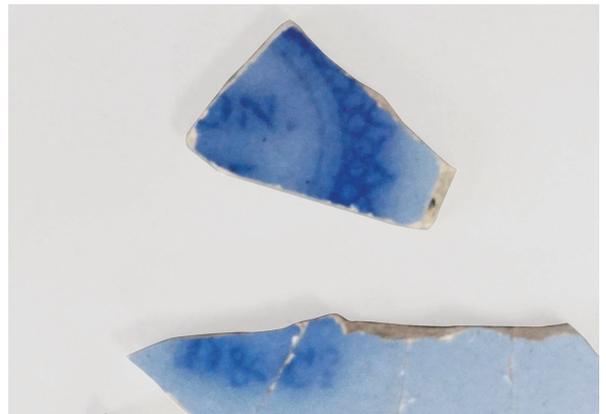


写真3 スコットランド
ジョン&マシュー・パーストーン・ベル社



写真4 イングランド ジョンソン・ブラザーズ社

(水村 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について)

目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 ……………	鈴木 宏和 (1)
— 縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について —	
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 ……………	水村 雄功 (21)
— 縄文時代前期後半の石槍との比較 —	
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 ……………	入江 直毅 (35)
— 縄文時代前期の押出型石匙を対象に —	
特殊器台弧帯文の施文方法 ……………	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって ……………	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭 ……………	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について ……………	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について ……………	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について ……………	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について ……………	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

古代から教室へのメッセージ事業について

藤田栄二 田中広明 堀内紀明

要旨 「古代から教室へのメッセージ」事業が開始されてから 20 年がたった。遺跡から出土した土器や石器などを用いた出前授業は、とても好評である。埼玉県埋蔵文化財調査事業団の設立 40 周年の節目を迎え、この事業にかかわった三名が、これまでの事業を振り返り、昨今の出前授業の様子、コロナ禍の中の事業展開や新たな試み、平成 29 年度告示学習指導要領とのかかわり、そして試行したオンライン事業などについてまとめた。出土文化財の活用が課題となる中、どのようにしたら、小中学生の豊かな教育に寄与できるのか。試行錯誤の記録である。

はじめに

「わっ！土器だ。」

家庭科室に急遽しつらえた考古学教室へ、子供たちが恐る恐る入ってくる。

「今日は特別、埼玉県埋蔵文化財事業団の方々が、私たちの小学校に実物の土器を持ってきてくださいました。本物の研究者のお話を聞くことのできる、またとない機会です。この二つの出会いを大切にしましょう。」

こちらは緊張する。担任教師の丁寧な紹介から、「古代から教室へのメッセージ」の授業は始まる。

埼玉県埋蔵文化財事業団が、埼玉県の「出土文化財を用いた活用事業」の委託を受け、「古代から教室へのメッセージ」を実施してから 20 年が過ぎた。紆余曲折がありつつも、この事業は継続され、現在に至っている。これは、埼玉県教育委員会市町村支援部や各教育事務所の御尽力はもとより、当事業団の担当者のたゆまぬ創意と工夫が重ねられた結果である。

本稿は、ここ 2、3 年の資料活用事業について感じ、考え実践した記録である。本稿が、出土文化財活用事業にかかわるすべての方々、学校関係者等の方々に御活用いただければ幸いである。

なお、本稿は 1 を堀内、2 を田中、3・4・5 を藤田が執筆した。

1 平成のメッセージ事業

本物の土器や石器を教室へ届け、考古学の研究者が、学級担任や社会科の教師とともに授業を行う。これが、「古代から教室へのメッセージ」事業である。

県教育委員会の「埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託」のひとつとして、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、県内の小学 6 年生や中学 1 年生を主体に年間 40 校実施している。

これまでは、小学校 6 年生社会科の編成上の都合から、歴史的分野の 4 月から 6 月に授業が集中していた（註 1）。しかし、令和 2 年度以降、6 年生はその間に公民的分野を履修することとなり、今年度は、7 月に集中することが予測されていた。ところが、新型コロナウイルスの影響によって、予定が大きく変更することとなった。

(1) 実施校の選定

公平性を保つため実施 40 校の選定は、指導委員会によって行われている。指導委員会は以下、11 人のメンバーによって構成され、県教育委員会が主催して年 2 回開催されている。

- ・県義務教育指導課指導主事 1名
- ・県社会科教育研究会長 1名
- ・県内の教育事務所（南部・西部・北部・東部・秩父支所）指導主事各1名
- ・政令指定都市（さいたま市）教育委員会指導主事 1名
- ・県立総合教育センター指導主事（高等学校籍）1名
- ・当事業団の資料活用部長と資料保存課長 各1名

この指導委員会では、主に設置要綱の確認、実施内容や状況の把握、次年度の実施予定校の決定が行われる。まず、前年度の12月中に県教育委員会より、市町村教育委員会をとおして各学校へ希望調書の配布が行われる。1月中には、その回答が教育事務所を単位に取りまとめられ、これまでの応募実績や実施状況に基づき優先順が付けられる。

その結果を受け実施予定校が選定され、2月下旬に開催される第2回指導委員会で検討され承認となる。承認内容に従い、3月下旬までに県教育委員会が実施予定校へ文書による通知が行われるが、その実務は当事業団が代行している。

例年、年間40校に対し5倍、約200校の応募があり、希望校すべての実施は困難な状況が続いている。

（2）授業の打ち合わせ

授業の内容や使用する教室などは、実施予定校ごとに事前打ち合わせを行い決定する。その際、なるべく学校や担当教諭の希望を取り入れるよう配慮するが、残念ながら「おまかせします。」という回答が多い。この事業の開始当初は、当事業団職員はあくまでもゲストティーチャーで、担当教諭の授業を補佐し、「チームティーチング」を行うことを理想としていた。

しかし、現在では当事業団職員が、1時間の特別授業を行う場合が多い。このようとき、小

学校では「ナベの歴史」として縄文土器（深鉢）、弥生土器（台付甕）、古墳時代の土師器（甑・長胴甕・支脚）を用いた授業を提案し、平成21年度から実施している。

この特別授業では、終盤の10分ほど「ミニ体験」として、①黒曜石で紙を切る、②縄文原体を粘土板の上で転がすなどを行うこともある。

なお、平成21年度以前には、「移動博物館」として資料の搬出入を輸送業者に委託する大掛かりな普及事業を行ってきた。しかし、予算や準備時間等の制約が大きくなり、また、増加する希望校数に対応するため、現在のような授業形態にたどり着いた。

（3）ナベの歴史

授業当日は、当事業団職員2名が、資料を公用車（ワンボックスカー）1台に積み込み、搬出から設置、そして授業を担当し、担任教師は補助に回る。授業は、「観て、触って、考える。」体験型である。なお、教室は理科室、家庭科室、図書室などの特別教室が多い。教師が児童を6班に分け着席させ、当事業団職員を紹介する。

まず、当事業団の仕事や土器の扱い方について説明し、資料の観察に入る。土器に触れ「重い、軽い」「厚い、薄い」「文様の有無」などの感覚的で直感的なこれら視覚・触覚に限定された感想にとどまらないように児童へ注意をうながす。

もちろん、実物の資料に接してこれらの視点や感想は大切だが、「そこから何が考えられるか」という発展的な思考を導くようにする。そのため、観察に入る前にあえて、児童たちには「今日持ってきた土器は、昔の人たちがナベとして使ったものです。」と最初から伝えている。

そのうえで、「同じナベなのにどうして形が違うのか」という課題を与える。それぞれの時代の土器を順に観察したあとは、各班で話し合い代表が観察結果や疑問点を発表する。それを受けて、当事業団職員が、土器と炉やカマドの模型を用い

て、実演をしながら、土器の使用方法について解説を行う。

そして最後に、「今日の私たちの便利な生活は、先人たちの生活と深く関わりあい、先人の努力や工夫の上に成り立っていること。」「先人たちの存在なしに、現在の自分たちは存在しないこと。」を積極的に伝え、社会科や歴史に限らず、今後の主体的な学習につながるように心掛けています。

(4) 学習用キットの活用

なお、学校からの希望によっては、「学習用キット」のなかから学校周辺の遺跡から出土した資料を持参したり、「黒曜石で紙を切る」「縄文の文様付け」などのミニ体験セットを活用したりしている。

この「学習用キット」とは、この「古代から教室へのメッセージ」事業が、これ以上、予算や人員、職員定数の関係から、実施校の増加が厳しいためそれを補完する目的で県教育委員会が、出土した土器を教室等へ貸し出す事業のことである。これも当事業団が「埼玉県収蔵埋蔵文化財保存活用業務委託」として、県教育委員会から委託を受け実施している。

「学習用キット」は、県内から出土した本物の土器や石器、埴輪等の出土文化財を手軽に教材としてあつかえるように、簡素な梱包と手続きによって実施している。「古代から教室へのメッセージ」を実施した学校の教師が、今度は自分でこの学習用キットを用いて、授業を行えることを目標に作られた。

幸い、「学習用キット」の貸出し件数が、ここ数年は、年間500セットを超えている。最近では、図工の授業でも利用されている。

また、「古代から教室へのメッセージ」のフォローアップとしても、学習用キットは活用されている。同事業を実施したのち、「江戸時代の授業を行っているが、江戸時代の土器などは借りられないか。」と問い合わせがあった。

しかし、当時の「学習用キット」には、江戸時代の資料を用いたキットが無かった。そこで、県教育委員会と相談し、当事業団職員が取扱うことを条件に整理事業の進んでいた日光街道栗橋宿跡の資料を準備して実施した。とても盛況だったことから、同資料を用いた江戸時代セットを新たに作成した。その後、地元である久喜市の小中学校などで盛んに利用されている（註2）。

2 令和のメッセージ授業

(1) 埴輪のスケッチから粘土細工の作成

(八潮市立中川小学校)

学区の向こうは、東京である。保護者の多くは都心に通うが、校舎の周りには畑が広がる。これが、中川小学校である。カモメが飛ぶ中川は、海がそれほど遠くないことの表れである。このあたりも古くは、海だったことを枕に授業を始めた（註3）。

さて、中川小学校における「古代から教室へのメッセージ」事業は、1時間目に「ナベの歴史」、2時間目に埴輪をスケッチして、コメント記入する授業を行った。その後、スケッチ画を「設計図」として、後日、陶芸用粘土でオリジナルのハニワを作る授業が行われている。

2時間目の授業は、まず古墳や埴輪の話をした。1時間目にナベの歴史を行ったので、古墳時代にカマドが人々の暮らしに浸透したころ、地域支配のモニュメントとして各地に古墳が築かれたこと、そしてその周りに埴輪が立て並べられたこと、埴輪には人や家、動物などがあり、1500年前の人々の暮らしが表されていることを伝えた。

6つの机には、それぞれ人物埴輪が置かれ、それを取り囲んで児童たちが着席する。埴輪のはなしよりも机の上の埴輪に興味津々である。そこで、1体を持ち上げ、内側を見せ、埴輪が空洞であること、これは、むかし「埴（はに）」と呼ぶ土（粘土）で作られたことなどを話す。そして、よく観

察してスケッチし、特徴や気付いたことなどのコメントを余白に書くように指示する。

大きさを物差しで測る児童、色鉛筆と埴輪の色を比べる児童、ハケ目の一本一本をていねいに描く児童、接合した割れ口を丁寧に描く児童、あたかも考古学の研究者が、実測図を描き、コメントを書き込むように記入していく。においを書き込んだ児童もいる。正面だけではなく、側面や背面を書いた児童もいて、まさに「展開図」である。

事業団職員は、詳しいことを説明しない。よく観察し、先生や友達、親などにどのようにしたら伝わるか。埴輪を見た感覚、感触を図とコメントで表現するのである。

ミズラを付けた埴輪に「Aくんのおかあさんとそっくりだ」とコメントがあった。しかし、これが男子の埴輪だとか、儀式のため盛装した埴輪だとか、その場で否定し、下手な説明を加えて興ざめさせてはいけない。すぐにコメントを消しゴムで消し、書き直してしまう。せっかくの観察眼、身近な人物との共通点を見いだせたのに、台無しになってしまう。

スケッチ画を回収してから、種明かしをする。男子と思った埴輪が女子だったことや、ボタンと思ったのが頸飾りだったこと、坊主頭と思ったら島田髻が剥落したことなどを解説すると、思いもよらない新しい気づきにつながる。

また、埴輪といえば踊る埴輪である。これをスタンダードな埴輪と考え、埴輪の目は怖い、思ったより大きくて重いなどのコメントも寄せられる。とにかく本物の魅力は、「強烈」なのである。

後日、図工の時間に陶芸用粘土でスケッチに基づいて、児童たちのハニワが作成された。ハニワの手が取れないように、また貼付が剥がれないように民間の陶芸会社が、製作指導を行い、本物の窯で焼き上げた。

作品は、県教育委員会が行った「第54回 郷土を描く美術展」に展示された。児童の作品とス

ケッチ画とともに実物の埴輪を展示した。個性豊かな児童の作品と実物が持つ迫力が、間近にみられ参観者に好評であった。

残念ながら会場が、埼玉県の北西端、本庄市の本庄東小学校であったため、南東端の八潮市から対角線の位置となる。とても遠く、同校児童の観覧は難しかった。しかし、その後八潮市立郷土資料館の企画でロビーにスケッチ画と作品が展示された。子供たちはもとより、父兄、市民に作品を鑑賞するチャンスが生まれたのである。

なお、埴輪や土偶のスケッチ画は、熊谷市立中条小学校、白岡市立大山小学校でも行った。前者は熊谷市にある老舗デパート「八木橋百貨店」、後者は久喜市にある大型商業施設「モラージュ菖蒲」において行ったほるたま展で実物の埴輪、土偶とともにスケッチ画を展示することができた。両者とも子供たちの個性豊かな作品と、実物の圧倒的な表現力に多くの関心が集まった。

八潮市立郷土資料館、八木橋百貨店、モラージュ菖蒲。学校以外の場所で自分の作品が展示されると、子供たちは俄然と張り切る。埴輪や土偶を見ただけ、説明を聞いただけではなく、歴史に触れ、歴史を記録したことは、子供の記憶にいつまでも刻まれたことであろう。

(2) ナベの歴史と埴輪のスケッチ画

(川口市立上青木中央小学校)

令和2年度の春は、新型コロナウイルスが猛威を振るい小中学校は、一斉休校となった。その余波が、「古代から教室へのメッセージ」事業に大きく響いたが、上青木中央小学校は、少人数に対応した発展的な授業展開を行うことができた。

新型コロナウイルス感染防止対策として、まず1クラスを二つに分け20人以下とし、4クラス157人を8グループとした。この8グループが、2時間ずつ授業を受講したのである。具体的には、1時間目は1・2組の前半が、家庭科室と理科室でナベの授業、後半が各学級の教室で埴輪の

スケッチを行い、2時間目は前半と後半が交替した。3・4時間目は、それを3・4組が行った。

家庭科室と理科室、二つの学級教室にそれぞれ事業団職員を配置し、家庭科室と理科室にそれぞれの学級担任、学級教室に補助教員を配置していただいた。事業団職員4人と学級担任4人、補助教員2人の都合10人で実施した。複雑な組み合わせだが、児童たちは柔軟に対応し、無難に授業が実施できた。

事前の打ち合わせでは、新型コロナウイルス感染防止対策として「密」をさけるため、クラスをメッセージ授業のグループと自習のグループに分け、1時間ごとに交替する案が準備されていた。けれども、自習の時間とするならば、学習用キットを用いた埴輪の観察、スケッチ画の作成を提案したのである。

同校との打ち合わせ後、川口市教育委員会と連絡を取り合う中で、川口市立文化財センター分館郷土資料館の御協力を得て、同資料館の展示室で実物の埴輪とスケッチ画が、展示していただける運びとなった。

いざ、授業となり、やはり郷土資料館に展示されるとなると、子供たちの意欲は俄然と高まり、授業時間が終了するのを惜しみながら熱心に、ていねいに仕上げている。いっぽう、ナベの授業と習書木簡の授業も熱心に聞き、2時間に及ぶメッセージ授業を滞りなく終了することができた。

郷土資料館の展示では、全生徒157名の作品群が、展示室の壁一面に掲示された。展示期間中、130人の児童や父兄が足を運ばれ、新たな入館者の掘り起こしにつながったと郷土資料館は評価された。

(3) 学習用キット授業案「文字と国づくり」

(深谷市立岡部西小学校)

「今年は、最高学年の思い出が何一つなく、この学校を巣立つこととなりとても残念だ。」

岡部西小学校の田野恵美子校長が嘆いた。新型

コロナウイルス感染防止のため、6年生が重要な役割を担う運動会や音楽会、そして修学旅行までも実施できなかったからである。

かねてから、埼玉県立教育総合センターの御指導を仰ぎ、令和元年度に作成した学習用キットの授業案について、実践していただける学校を探していた。当事業団は、県教育委員会北部事務所や深谷市教育委員会を通じて、同小学校を御紹介いただいた。そして、田野校長をはじめとする同校の方々の期待に少しでも報いるために、「学習用キット」を用いた授業(事業団独自の事業)を実施する運びとなった。

実施にあたり、6年生担任の松本先生と代島先生の二人と30分ほど打ち合わせを行った。松本先生は、社会科が得意な中堅の先生、代島先生は、算数が得意という採用三年目の元気あふれる先生である。打ち合わせ日には、室町時代まで進んでおり、当日は江戸時代の始まりごろを学習中という。

そこで田中は、「文字と国づくり」の授業案を提案した。松本先生は、この授業の目標を「史料から人々の暮らしの様子について考え、歴史を楽しもう。」と立てた。学級担任が授業を主体的に進め、田中は専門的なコメントを加える。

まず学級担任が、平安時代の円面硯を掲げ、「さて、これはなんでしょう。」から授業は始まった。「お椀」「植木鉢」「灰皿」子供たちは、直感的に普段目にする道具や容器をあげる。そこで学級担任が「実はこっちが上だよ。」と上下をひっくり返す。「ここをさわってごらん。」恐る恐る触れると、「つるつるしている。」

そこで学級担任が、「そう、ここで墨をすった。硯だよ。」子供たちが、「縄文時代に硯があるの。」「文字を書いたのは、奈良時代からじゃないの。」と質問が飛ぶ。

学級担任が、田中に水を向ける。「土器は、縄文土器だけじゃありません。現代まで使われてい

ます。いま、硯は石で作られています、奈良時代の硯は土の焼きものでした。」

田中が、学級担任へ戻すと、「今日の目標は、(史料から人々の暮らしの様子について考え、歴史を楽しもう。)です。この硯を通じて、歴史を考えてみましょう。さて、ここに4種類の硯があります。古い順に並べてみましょう。」

机の上には、4種類の硯が並べられ、A・B・C・Dの札が置かれている。担任が、黒板にそれぞれの写真と記号を貼り付ける。教師は、グループごとに話し合いをさせ、代表が発表した答を板書した。

「では、正解と解説をお願いします。」田中は、正しい順番のグループに○を書く。正答率は8割。大いに生徒は喜ぶ。そこで、写真を正當順に並べ、その上に奈良、平安、室町、江戸時代と書き、代表的な人物を生徒に聞く。即座に「小野妹子、中臣鎌足、桓武天皇、菅原道真、平清盛、足利義満、徳川家康」などが飛び出す。

そこで硯の写真の下に人物名を板書する。板書する人物は、外交や交易などで中国とかかわりが深い人物に限る。そして、それぞれ歴史的なできごとを発表させる。遣隋使や遣唐使、日宋貿易、鎖国などが導ければ、授業の振り返りになり成功である。さらに外交や貿易などの言葉が引き出せれば、発展的な学習につながる。

そして、「墨で書かれた文字、漢字は、中国から来ました。文字を書いた紙、道具の筆と墨、そして墨をする硯が、中国から伝わりました。紙、筆、墨は腐って無くなりますが、土や石で作られた硯は、腐らないので遺跡に残った。それぞれ形が違うのは、その当時、中国で流行っていた形の硯が、日本にもたらされたからです。」

ここまで話し、おもむろにコンテナの蓋を開け、径30cmを超える大形の円面硯を取り出す。「これも硯です。埼玉県でもっとも古い飛鳥時代の硯です。」児童の前を巡回すると、立ち上がってのぞ

き込む。

「中臣鎌足のころの硯です。奈良時代になると次第に小さくなり、平安時代には、チリ取り形の硯がもたらされました。平清盛が、日宋貿易を行ったころには、四角い石の硯が輸入されます。その後、江戸時代になると日本の国内各地で石の硯が作られ特産物となり、藩の財政を潤しました。」

田中が解説を加えると担任が、江戸時代の硯をさしながら「子供たちが、寺子屋で文字を学ぶようになったのも、このころですね。」と振る。そこで児童に木簡のプリントを配り、ベニヤ板にカラーコピーを貼ったレプリカを掲げ「これは、奈良時代の木簡のレプリカです。紙が貴重だった時代、板切れに墨で文字を書いたことは勉強しましたね。さて、何が書いてあるのでしょうか。」と問う。

「長」、「有」、「是」、「十」、「月」など児童が口々に叫ぶ。大人は木簡の文字を文章として理解しようとし、「これは読めない」とすぐに投げってしまう。しかし、子供たちは違う。読めた文字から口にする。そこで担任教師が、「これは文字の練習をした木簡、奈良時代の漢字練習帳です。」と明かし、田中に解説を求める。

「プリントの右、中央を見てください。「長」と「是」というきれいな文字があります。これは手本です。おそらく親や先生、当時の先生はお寺のお坊さんやお役人さんです。この子は、「長」と「是」が上手に書き分けられなかったのでしょうか。だから手本を書き、練習したのです。ところが、だんだん疲れてきて……。」

つぎに木簡を裏返し、下のほうを指し、「ここに「十月(じゅうがつ)」、「十月」、「十月」とあります。実は、これは「十月」ではありません。さて、なんて書いてあるのでしょうか。」口々に思ったことばをあげる。「とつき」、「じゅうつき」などのほか、「かなづき」としゃれたことをいう児童もいる。

令和2年度「学習キット活用授業」展開例

- 1 日時 10月1日(木) 9:40~10:25 (6-1)
10:45~11:30 (6-2)

2 場所 岡部西小学校 理科室

3 準備 埋蔵文化財収蔵施設所蔵の資料

4 本時の展開

学習活動	学習内容	指導上の留意点
1. 本時のめあてを確認する。	資料から人々の暮らしの様子について考え、歴史を楽しもう。	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が埋蔵文化財調査事業団の田中、() について紹介する。
2. 硯を古い順に並べる活動に取り組ませる。	<p>Q ここに4種類の硯があります。この硯を古い順に並べてみましょう。グループで話し合っ、並び替えをしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国との交流を通じて、硯の形は変化したこと 	
3. 木簡の解読に取り組む。	<p>資料の硯は、理科室に4×2 セット用意、平安時代土器セットを3点×2 セット準備する。班ごとにローテーションで硯を見たり触ったりしながら、課題を解決できるようにする。 待っている班は拡大された資料をみながら話し合いを進めていく。</p> <p>Q 木簡は紙が貴重だった時代、紙の代わりに文字を記した木の札のことを言います。木簡に書かれている内容は何でしょうか？ どんな文章なのかをワークシートに書いてみましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・答え合わせの後、田中先生に解説してもらおう。 ・ワークシートにメモ欄を設け、大切なことを記入できるようにする。
4. その他の資料についての説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・木簡は文書、手紙、帳簿などの用途の他に文字の練習帳としての役割もあったこと <p>資料から当時の人々の生活の様子が分かること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・托鉢 ・蘇の壺と木簡 	<ul style="list-style-type: none"> ・答え合わせとともに田中先生に解説してもらおう。 ・それぞれの資料の用途などについて、解説してもらおう。
5. 本時のまとめをする。	資料をくわしく調べると、当時の人々の暮らしの様子が分かる。	
6. ふりかえりをする。		<ul style="list-style-type: none"> ・時間があれば、児童にふりかえりを発表させる。
7. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団の先生方にあいさつをする。		

第1図 岡部西小学校の授業例



第2図 習書木簡

そこでヒントを出す。「みなさんは、「話」という字を練習するとき、「言」、「言」、「言」と書き、あとで「舌」、「舌」、「舌」と書いたことはありませんか。」と聞くと、「ある。」と叫ぶ。そこで木簡を裏返すと、「裏には、「有」が練習されていますね。」と畳みかける。勘のいい子が「あ、わかった」と声をあげる。「そう、「有」なんだよ。」

「この木簡は、熊谷市のスポーツ文化公園から出土しました。去年、ラグビーのワールドカップのあったところです。千二百年前の子供も今の君たちと同じように漢字を練習していました。この子は、大人になったとき、漢字にかかわる仕事に就く必要があったので一生懸命、練習したのでしょう。この漢字を練習したのは、お役人の子供だったかもしれません。」

ここまで話し、巻物を取り出し、「千字文」と板書する。

「千五百年前に中国から漢字を練習するテキストが伝わりました。『千字文』といいます。」(註4)といいながら、担任教師に手伝っていただき巻物を広げる。教室の端から端まで広がる。子供は席を立ち、一斉に自分の名前の文字を探し出す。

「みなさんは、小学校6年間で漢字を何文字習いますか。」ときくと、二百字、五百字などと答が返る。「答は1006字です。奈良時代の子供よりもみなさんのほうが、小学校卒業までに習う漢字の数は多いのです。」そして、次のようにまとめた。

「このように考えると、1200年前の子供が、身近に感じられませんか。歴史というと、古い、私たちは関係のない人々のこと、あるいは偉い政治家や貴族、武将のことと思いがちです。埼玉県熊谷市に住んでいた子供が、みなさんのように、漢字を練習していたと考えたら、ワクワクしませんか。」

妻沼東中学校 古代から教室へのメッセージ授業展開例

1 日時 11月1日(木) 9:35~10:15(1-2) (10:25~11:05)(1-4)
13:40~14:20(1-1) 14:30~15:10(1-3)

2 場所 熊谷市立妻沼東中学校 調理室

3 準備 埼玉県教育委員会の学習用キット、パワーポイント資料、ワークシート

4 本時の展開

学習活動	学習内容	指導上の留意点
1. 本時のめあてを確認する。	土器や遺跡から貴族と民衆のくらしを考える。遺跡から1200年前の地震を復元し、防災に役立てる。	<ul style="list-style-type: none"> 寺井先生が埼玉県埋文事業団の田中、瀧瀬を紹介する。 埋文事業団の紹介。文化財は、国民共有の財産であることを伝える(田中)。
調理室の机(班ごと)には、事前に学習用キットが1セットずつ置かれている。		
2. 土器や遺跡から平安時代の貴族と民衆のくらしを考える。	<ul style="list-style-type: none"> 平安時代の貴族と民衆のくらしの違いを復習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 衣食住の違いをまとめた表(電)を用いる(寺井)。
Q それぞれ手に持ち、何時代の土器で何に使ったか、どんな階層(貴族か民衆)の人が使ったかなどを観察(3分程度)し、発表してください。		
3. 平安時代の地震と遺跡について。	<ul style="list-style-type: none"> 食器は現代と形に近いが、ナベは土製だったことや、民衆と貴族とでは衣食住が異なることを実物で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表を促し(寺井)、解説(田中)をおこなう。 住居は(電)で示す(田中)
Q この土器を使っていたころ、平安時代の818年、関東地方で大きな地震が起きました。この図は、その地震の痕跡が残された群馬県と埼玉県の遺跡の分布図です。次の番号に色を塗ってください。色別に災害の種類を推定し、発表してください。		
4. 歴史の史料から地震と考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> 地割れ・液状化現象・洪水等の発生が、地形によって異なることを分布図(ワークシート)で把握する。 被害の状況から1200年前の地震の震度がわかることを学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 弘仁地震の遺跡地図(電) 発表後、答え合わせを行い(寺井)、被害の種類ごとに遺跡の写真を(電)を用いて解説(田中)。
Q 弘仁地震にかかわる史料を読み上げます。わかったことを発表してください。		
5. 熊谷市のハザードマップの紹介。	<ul style="list-style-type: none"> 歴史史料は、読み方によって隠れた情報が引き出せることを学ぶ。 妻沼東中を地図に記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 地震史料を配布。読み下し文(電)を音読する(寺井)。 考古学の研究者は、地震史料をどう読むか解説(田中)。 ハザードマップ(電)
6. 本時のまとめをする。	遺跡や史料をくわしく調べると、災害のことや当時の人々の暮らしの様子が分かる。	
7. あいさつをする。		

第3図 妻沼東中学校の授業例

(4) 遺跡の発掘資料から防災教育

(熊谷市立妻沼東中学校)

「昨年の台風では、近くの福川が増水し、防災意識が、とても高まっています。」妻沼東中学校の小澤晃司校長のお話である。

中学校ということもあり、妻沼東中学校では、「遺跡の発掘から防災を学ぶ」というテーマで、古代から教室へのメッセージ事業を提案した。社会科の寺井先生には快く承諾いただけ、校長室で冒頭の会話となったのである。

授業は、まず寺井先生が、板書した今日の目標①「土器から平安時代の貴族と民衆の暮らしを考える。」、②「遺跡から歴史災害を復元し、防災に役立てる」を読み上げた。これまでに歴史を平安時代まで行い、地理に入っているが、①は歴史、②は地理（本来は地学であろう）の内容を学習する特別授業であることを生徒に告げた。

つぎに田中が準備したパワーポイントを電子黒板に映し、平安時代の貴族と民衆の暮らしについて振り返りを行った。衣・食・住、それぞれのスライドを見ながら期末テストにかかわり、「十二単」や「寝殿造り」などをチェックさせた。

そのあとで事業団職員2名の紹介が行われ、田中が土器の扱い方や観察について注意を行った。机の上に並べてある平安時代の土師器や須恵器の食器と甕に触れた。

田中から椀や皿などの食器は、現代の形に近いこと、甕は煮炊きに用いたナベであることなどを話し、1200年前の民衆は、このような土器を用いて、縄文時代以来の竪穴住居に住んでいたことなどを解説した。

そこで寺井先生が、「このころ、関東地方の内陸に巨大な地震がありました。これからその地震の跡が発見された遺跡の地図を配ります。」といひ、弘仁地震の白地図を配った。

そこには、埼玉県北部、群馬県南部、栃木県西部が描かれ、地震の痕跡が発見された遺跡が、白

抜きの○と番号で記されている。寺井先生は、赤○の横に1から3、5から54、青○の横に55から63と書き、色をそれぞれ塗らせると、赤は地割れ、青は洪水が見つかった遺跡だと告げ、田中に振った。

そこで田中が、解答と解説を行う。電子黒板には、赤の分布図と被害の写真が写されている。赤は、赤城山南麓の傾斜面に集中する。地割れは震度7で発生する。寺井先生が震度7と板書する。地震で地面が割け、土砂崩れが起こり、そして谷が埋まったことを想像させる。

また、青は洪水の痕跡が見つかった遺跡である。分布図と写真を見せ、「この地震は文献史料が残っていて、7月に発生したことがわかっています。7月は旧暦ですから、新暦では8月下旬から9月上旬となります。」と話すと、寺井先生が生徒に「このころ起こる自然現象は何でしょう」と問い、台風を導き出す。

そこで田中が続けて、「赤城山から流れる早川や荒砥川・神沢川・粕川などの中小河川の下流、山麓から平野への出口付近で洪水が発生しました。山間地で谷を埋めた土砂が、小さなダムを形成し、台風シーズンと重なったことから、下流に大きな被害を及ぼしたのです。洪水の砂は遺跡一面に広がり、用水路を砂が埋め尽くしました。」

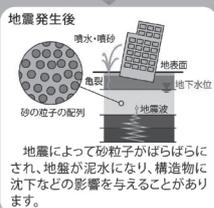
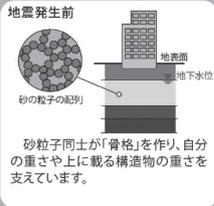
そして、色を塗らなかつた○の脇に寺井先生が、液状化現象、震度5強以上と板書し、田中に解説を求めた。「液状化現象は、東日本大震災や北海道の地震、熊本地震などでマスコミが大きく取り上げ社会問題ともなりました。寺井先生は、千葉県幕張で遭遇したそうですが、」と振ると、千葉マリンスタジアムで目撃した東日本大震災のときの液状化現象について、実体験を詳しく語った。

液状化現象については、令和3年度から中学1年生理科（地学）で学習する（『学習指導要領解説』）ので、まだ令和2年度の生徒は学習していない。そこで、液状化現象の発生メカニズムを

液状化危険度マップ

液状化の発生のしくみ

液状化とは、地震の揺れにより砂地盤を構成する砂粒子がばらばらになるため、周辺が地下水でみたされた地盤が一時的に液体のような状態となり、地表に泥水や砂が噴き出し、地盤の強度が弱まり、地盤の沈下が発生する現象です。



液状化危険度マップとは

液状化危険度マップは、地形に応じた液状化の発生のしやすさの違いから液状化の可能性を推定して作成しています。液状化危険度マップを見て、液状化の可能性が高い地域を把握しましょう。

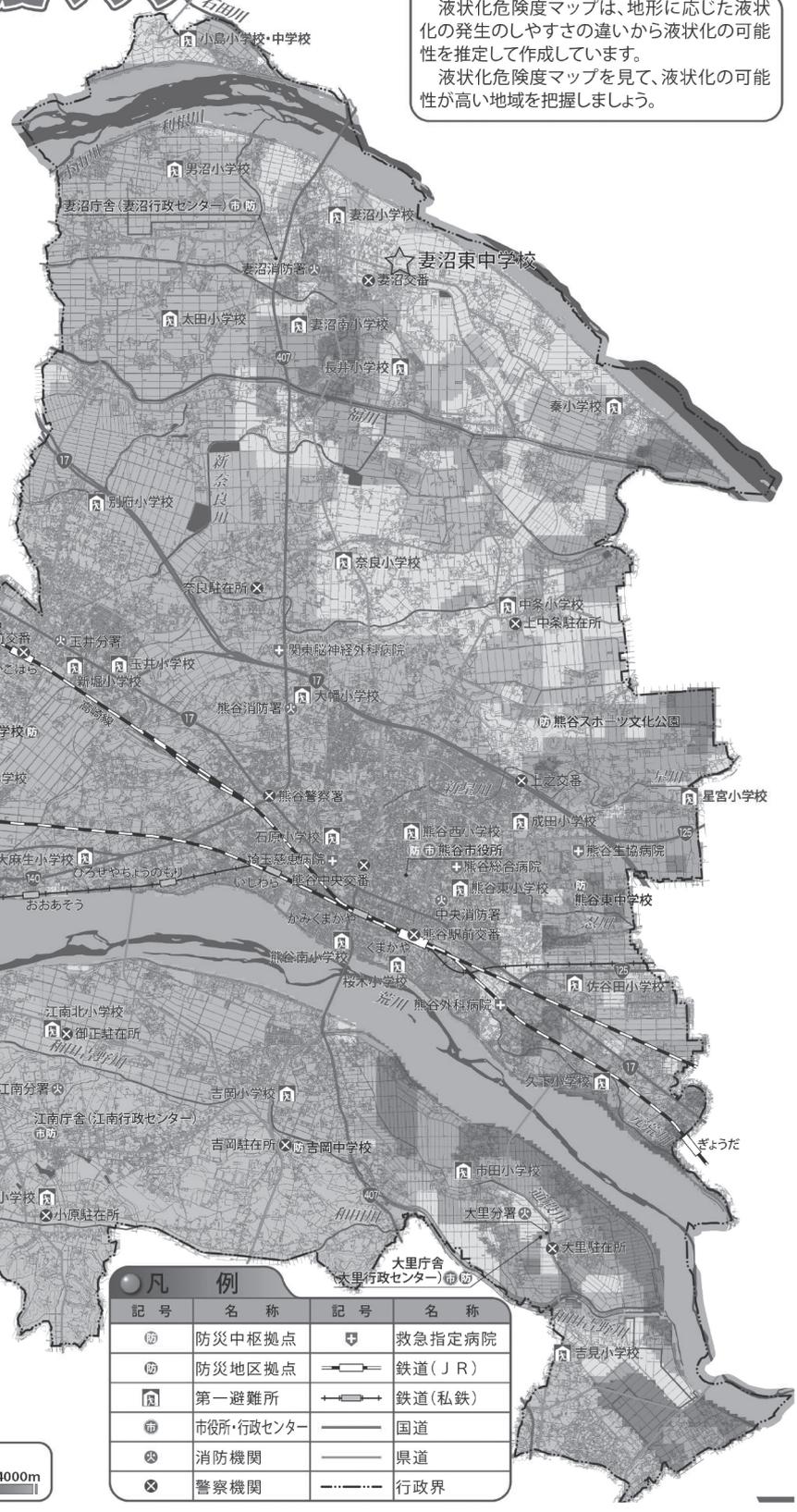
液状化危険度

高い
やや高い
やや低い
低い
液状化しにくい



凡 例

記号	名称	記号	名称
Ⓜ	防災中枢拠点	Ⓜ	救急指定病院
Ⓜ	防災地区拠点	—+—	鉄道(JR)
Ⓜ	第一避難所	—+—	鉄道(私鉄)
Ⓜ	市役所・行政センター	—	国道
Ⓜ	消防機関	—	県道
Ⓜ	警察機関	—	行政界



第5図 熊谷市の液状化危険度マップ

らに□は、屋根から瓦が落下した遺跡です。当時、瓦を葺いていた建物は、お寺か役所です。この屋根瓦の落下は、震度5弱で発生します。いまでは、地震が発生するとテレビでA市は震度6強、B町は震度5弱などと気象庁が発表し、地震学者が解説を行います。

しかし、1200年前ですよ。1200年前の地震が、発掘調査された遺跡を分析することで、震度がわかるのです。震度がわかれば、この地震の震源や特徴、被害の広がりもわかり、今後の防災につながります。

市町村では、ハザードマップという危険予測地図を準備し、ホームページにあげています。私たちがどのような土地にいらしているのか、あらかじめ知っておくことはとても大切なことです。」とまとめた(註5)。

3 学習指導要領とメッセージ授業

日本考古学協会の社会科・歴史教科書検討委員会では、「考古学資料が、新学習指導要領の眼目とされる『主体的・対話的で深い学び(いわゆるアクティブラーニング)』にも有効であることが明らかになった」とし、教材としての考古学資料の有効性を報じている(註6)。

従前の学習指導要領(文部科学省2008)は、平成20年3月に告示されたものであるが、それから9年後の平成29年3月に、現行の学習指導要領(文部科学省2017)が告示された。その移行期の真ただ中、藤田は、県教育委員会の博物館施設等を含む社会教育施設を所管する部署に在籍していた。冒頭に新たに前文を配し「社会に開かれた教育課程」を高らかに謳う新しい学習指導要領が告示されたのを機に、これからの学校教育と社会教育の在り方を必死に模索した。そのときの知見にもとづき、考古学資料を中心に据えた「メッセージ授業」の有効性について、学習指導要領との関係性の側面から述べたい。

(1) 現行の学習指導要領と博物館等の施設

本題に入る前に、現行の学習指導要領(以下、「学習指導要領」という。)について、簡単に触れてみたい。

次頁の資料は、埼玉県教育局在籍時に作成したものをベースとし、平成31年1月に埼玉県新規採用学芸員研修で使用したものである。当時、いわゆる「アクティブラーニング」というキーワードで話題となった学習指導要領の改訂のポイントを、本事業団が本拠としている文化財収蔵施設を含む「博物館等の施設」の視点からまとめてある。

改訂のポイントは、いわゆる「アクティブラーニング」的な授業改善を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」(註7)と定義し、そのために、「博物館(中略)等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実する」(註8)とした点である。さらに、この博物館等の積極的活用の記述を「総則」に明記し、総合的な学習の時間だけではなく全ての教科活動等に求めている。これらの改訂の背景には、博物館等が所蔵する「ほんもの」に子供たちが出会うことをきっかけに、「主体的」学びに向かわせる効果が期待できるとの考え方があるのではないかと推察している。

(2) 「ほんもの」が与えるインパクト

ところで、当事業団において埋蔵文化財とかかわるなかで、学習指導要領の改訂ポイント、いわゆる「アクティブラーニング」を実現するにあたり、事業団は素材の宝庫と感じるに至った。その理由は、二つの「ほんもの」の存在にある。一つ目の「ほんもの」は出土遺物である「土器」等であり、二つ目は発掘調査・整理の調査員(当事業団職員)という「研究者」である。この二つの「ほんもの」の威力は、実際に「メッセージ授業」を実施した学校から実感としての声が寄せられており、それを裏付けるように「メッセージ授業」の実施倍率は5倍以上と、非常に人気が高い。

これからの学校教育と社会教育の在り方
～ 社会に開かれた教育課程（新学習指導要領）を踏まえて ～

新小学校学習指導要領（中学校も同内容） ～ 総則等は小・中とも平成 30 年度から実施 ～

- 小学校は 32 年度、中学校は 33 年度から全面実施だが、「総則」「総合的な学習の時間」「特別活動」は移行措置により 30 年度から新学習指導要領による。（文部科学省告示第 93・94 号）

前文

- 社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。
- 児童や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である。
- 児童が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにしていくことは、教職員をはじめとする学校関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から児童や学校に関わる全ての大人に期待される役割である。

第 1 章 総則

第 1 小学校教育の基本と教育課程の役割

2 学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第 3 の 1 に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、次の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、児童に生きる力を育むことを目指すものとする。

(2) 道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること。

第 3 教育課程の実施と学習評価

1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

各教科等の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(7) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。また、地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。（← 現行の学習指導要領では、類似の文言が「第 4 章 総合的な学習の時間」にあるが、「第 1 章 総則」にはない。）

(3) ナベの授業と学習指導要領

メッセージ事業の看板メニューである「ナベの進化」の授業は、歴代の担当職員が、様々な工夫・改良を加えながら継続してきた。「人気が高い」と言っても、単に「子供受けする」と言うことではない。この授業について「学習効果が高い」ことが、古代から教室へのメッセージを経験した先生方からの口コミで広がり、倍率を高めているようである。

ナベの授業については、1-(3)で紹介したが、ここでは、実際に久喜市立栢間小学校で藤田が作成した簡略な学習指導案(以下「略案」という)(第6図)を示す。学習指導要領との関連性を示しながら、ポイントを絞って学習効果が高いことを裏付けてみたい。

ア 「本物の土器」に出会う非日常体験効果

「ほんもの」のインパクトは、教室に土器が出現した時の子供たちの「わ〜っ」という歓声とキラキラした眼差しに歴然と現れる。本物体験によって、「知識の杭」が打ち込まれる瞬間である(註9)。

この現象が、子供たちをいわゆる「アクティブラーニング」の原動力となる「主体的」学びへ瞬時に向かわせる効果である。学習指導要領の文言を借りれば、「博物館(中略)等の施設」である当事業団の活用を図り、本物の土器という「資料を活用した(中略)学習活動を充実する」ことにより、子供たちを「主体的・対話的で深い学び」(註7・8)に向かわせるのである。

実際の学校現場では、「ほんもの」の与えるインパクトは大きいと分かっていても、博物館等には社会科見学のような特別な行事日にしか行くことができない。しかし、メッセージ授業では、教科書の写真でも見たことがない「ほんもの」の埼玉県の土器が、ガラス越しではなく目の前に出現する。しかも触れることもできる。この点においては、博物館を凌ぐインパクトがあるかも知れな

い。縄文・弥生・古墳の三時代の土器(実物資料)の登場によって、瞬時に教室がタイムスリップし、古代と言う「非日常」空間となり、児童を「主体的」学びに向かわせるのである。

イ 「本物の研究者」に出会う非日常体験効果

「略案」(第6図)で「職員紹介(敢えて作業服)」としたが、これも「ほんもの」効果を狙ったものである。教室では日頃から、教える専門家である先生たちが、教科書を中心に学びを教えている。一方、事業団の職員は、教えるプロではなく、作業服を着て実際に発掘調査・整理作業をする調査の担当者であり、研究者でもある。子供たちが日常的に接することがない作業服を着た未知の仕事をする「ほんもの」の「研究者」が、「ほんもの」の土器を携えて現れる。このことによって、教室の「非日常」度はさらに増幅され、子供たちが「主体的」に学ぶきっかけとなるインパクトを与えるのである。

さらに、事業団の「研究者」が当たり前のように行っている、遺跡や遺物の見方・考え方を通して、学習指導要領に言う「社会的事象の見方・考え方」(註10)を実感させることができる。これらの相乗効果によるインパクトは、博物館施設では与えることが困難な要素であり、県教育委員会がメッセージ授業を敢えて当事業団に委託している意義ではないかと考えている。

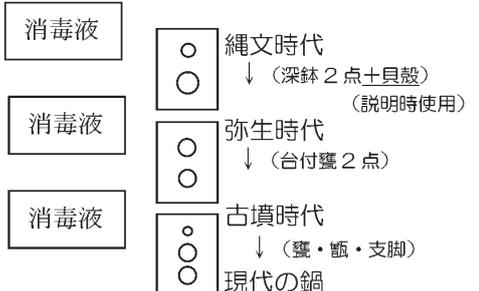
ウ 煮炊き具から歴史の展開を考える

メッセージ授業は、「煮炊き具の変遷(ナベの進化)」をテーマに、縄文・弥生・古墳時代の実物資料(土器)と現代の「ナベ」を観察・比較し、現代に至るまでの道具の変遷を辿る流れで展開される。文字が無い縄文時代から現代にいたるまで、身近な生活用具であるナベの変遷で時代を串刺しにしてしまうのである。しかも、各時代を象徴するナベである実物の土器を目の前にし、実際に手に取って質感や重さを感じ取る。このことにより、現代のナベにいたるまでの「歴史の展開を考え

「古代から教室へのメッセージ」授業展開（45分）の略案【栢間小での例】

◎目指す学習効果

「煮炊き具の変遷（ナベの進化）」をテーマに、縄文・弥生・古墳時代の**実物資料（土器）**を**観察・比較し、人類の智恵と工夫による道具の変遷**（縄文→（土器の進化）→弥生→（カマドの発明）→古墳）を「**見方・考え方**」を働かせて学習することにより、「**歴史を学ぶ意義**」を実感させるとともに、「**古代人から受け取ったメッセージを誰かに伝える**」ことにより、**表現力や学びに向かう力、人間性を育む**きっかけとしてもらう。

授業の流れ	学習支援の内容（事業団職員）	時間
事前宣伝 ・本物の土器がやって来る！	←（担当教員との事前打ち合わせで、事前宣伝を依頼）	前週
教室配置 	授業準備 ・ワンボックス車で搬入 ・教室への運び込み ・机にカバーをかける ・土器等を配置する ・各机に時代ラベルを置く	授業の約1時間前
導入 ・挨拶後、先生から事業団に振っていただき、授業開始	導入・学習テーマ解説 ・職員紹介（ 敢えて作業服→本物 ） ・事業団の仕事の紹介 ・学習テーマの概要説明（煮炊き具の変遷など） ・注意事項（土器の持ち方など） ・ テーマに基づいた観察の仕方	10分
観察（各時代の遺物を観察） ・先生から3班の時代割振を指示 ・先生からローテーションの声掛け 各時代3分（最大5分）	観察補助 ・持ち方や消毒の見回り ・遺物の 見方、考え方 （着眼点）などをアドバイス ・適宜、遺跡・遺物の概要紹介	15分
まとめ ・必要に応じて、先生が発表者を指名。 — 討論（グループで話し合い・発表など）— （※コロナ禍における授業であったため、グループで話合うなどの討論は中止した）	観察結果の総括 ・観察結果等を生徒から聴取 ・テーマに沿った解説（パネル・模型などを使用） ・授業の総括（「 歴史を学ぶ意義 」、「 メッセージを誰かに伝えて 」）	15分
ボーナストラック ・小林八束1遺跡の土偶	解説 ・近隣の（最新）文化財を紹介	5分
	撤収作業 ・遺物梱包 ・教室からの運び出し・車積み込み	約40分

第6図 栢間小学校の授業例

(註11) 実感することができるのである。

エ 歴史を学ぶ意味と歴史の担い手となること

小学校学習指導要領には、「現在の自分たちの生活と過去の出来事との関わりを考えたり、過去の出来事を基に現在及び将来の発展を考えたりするなど、歴史を学ぶ意味を考えるようにすること」(註12)との記述がある。

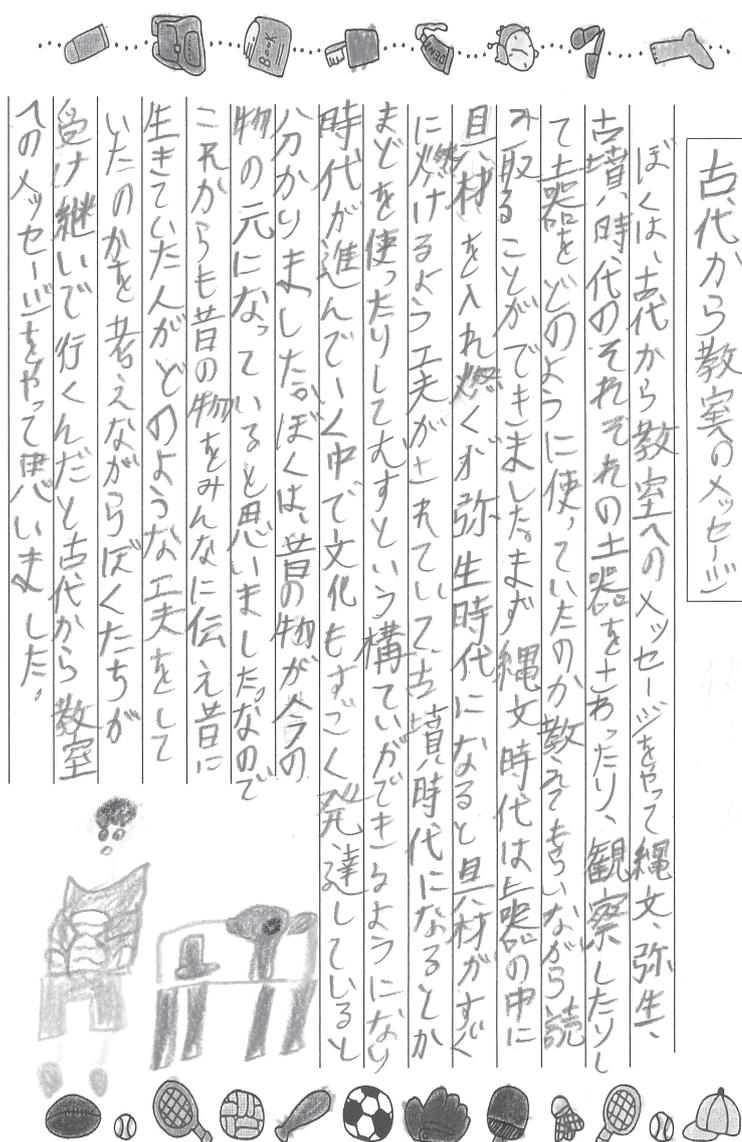
また、『小学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省2017)によれば、「歴史を学ぶ意味を考える」とは、「歴史学習の全体を通して、歴史から何が学べるか、歴史をなぜ学ぶのかなど歴史を学ぶ目的や大切さなどについて考えること」(註13)とあり、歴史を学ぶ上で最も重要な要素であると考えられる。

しかしながら、日頃の授業では、時代という時間軸で輪切りにして学ばせていく都合上、その時代の歴史的事実を覚えさせることを目的としてしまいがちである。また、「歴史を学ぶ意味」を考えさせることが大切と

分かっているとしても、歴史的事象を輪切りにして順を追って学ばせる日頃の授業では、現代までの繋がりを感じさせにくい。

ところが、「煮炊き具の変遷(ナベの進化)」は、身近な生活用具であるナベに焦点を絞り、現代のナベにいたるまでを串刺しにして「歴史の展開を考える」ことによって、子供たちは、「歴史を学ぶ意味」を実感できるのである。

さらに『小学校学習指導要領解説 社会編』(文部科学省2017)によれば、「今日の自分たちの生活は、長い間の我が国の歴史や先人たちの働きの上に成り立っていることや、遠い祖先の生活が



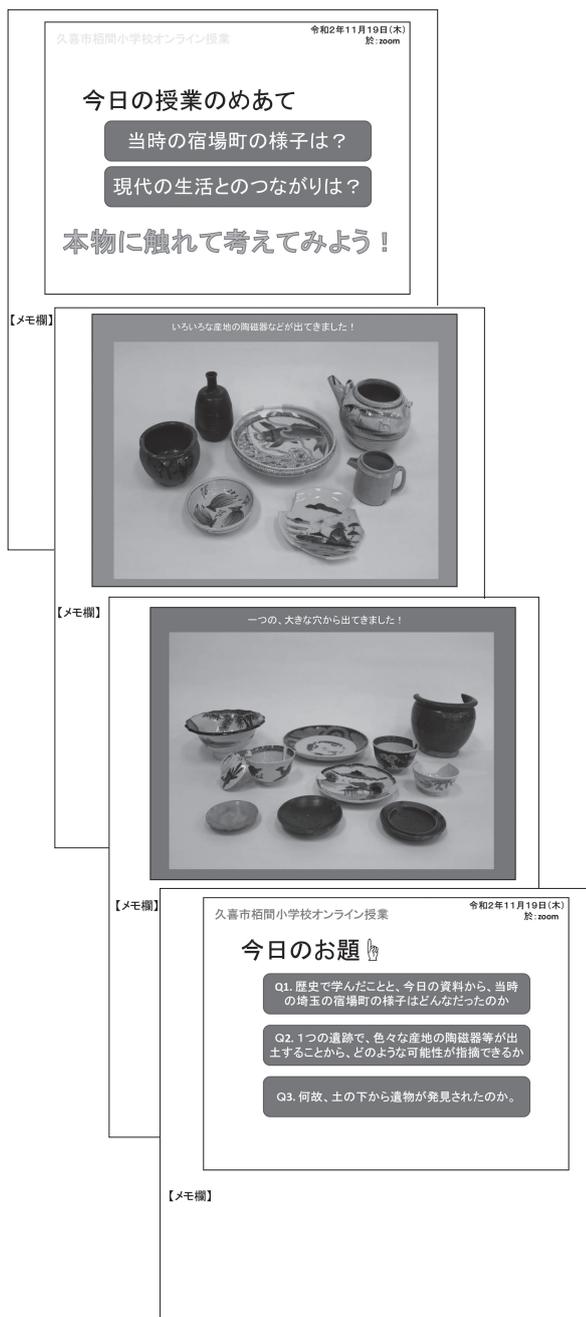
第7図 栢間小学校の感想文(1)

自分たちの生活と深く関わっていることなどを理解できるようにし、自分たちもこれからの歴史の担い手となること(中略)について、考えを深めるようにする」(註14)とある。

子供たちの感想文(第7図)に「昔に生きていた人がどのような工夫をしていたのかを考えながら、ぼくたちが受け継いでいくんだ」とあるのをご覧いただきたい。「歴史を学ぶ意味」を考え、「これからの歴史の担い手」としての自覚を促す効果が如実に表れている。

オ 学習内容の定着と表現力を高める

学習指導要領では、「歴史を学ぶ意味」を考え



第8図 栢間小学校のワークシート

ることの大切さについて記述するとともに、さらに、それらを表現することにより、「思考力、判断力、表現力等を身に付けること」（註15）の大切さを説いている。

「古代から教室へのメッセージ」授業では、その実施後、タイトルにあるとおり、子供たちは、古代から強烈なメッセージを受け取る。

「古代からどんなメッセージを受け取ったか、

そしてそのメッセージを「誰に送ったか」。そのようなことを担任の先生が、子供たちに投げかけると、「今日、ほんものの土器を持ったんだよ！」と家庭などでの会話というアウトプット（表現力）につながる。一時的なインパクトで終わるのではなく、興奮を誰かに伝えることで、学習指導要領に言う、表現することにより、「思考力、判断力、表現力等を身に付ける」（註15）ことができ、学習効果はさらに定着すると考える。

子供たちの感想には「この体験で学んだことや感じたことなどはたくさんの人に伝えたい」との記述が散見された。「古代から教室へのメッセージ」の学習指導要領との関係性を、担任の先生や教科担当の先生たちと共有した効果が如実に表れている。

4 「学習用キット」とオンライン授業

前述したナベの歴史をはじめとするメッセージ授業は、大きな学習効果を期待できる優れた授業ではあるが、県からの委託予算では、年間40校しか実施できない。

この課題を少しでも緩和するため、事業団では「学習用キット」が貸出できることを学校に周知し、授業における活用を呼び掛けている。

そんな折、メッセージ授業を行った久喜市立栢間小学校の小澤教諭から「江戸時代についてオンラインで授業をしてみたい」との申し出があり、学習用キットを活用した授業を行っていただいた。ここでは、実際に栢間小学校で授業を行う際に作成したワークシート（第8図）、展開例（第9図）を例に、「学習用キット」を活用したオンライン授業について述べてみたい。

（1）事前準備

「学習用キット」を借りていただく小澤教諭には、埼玉県文化財収蔵施設（当事業団本部）に来ていただき、まずは、本事業団の整理作業の実際の様子、収蔵施設で収蔵する膨大な遺物を御覧い

「学習キット【江戸時代】活用」オンライン授業 展開例

- 1 日時 11月19日(木) 11:35~12:20(45分)【事前準備10:40~】
- 2 場所 久喜市立栢間小学校 図工室(埋蔵文化財調査事業団とZoomを用いてオンライン接続)
- 3 準備 学習用キット【江戸時代】(東部16-1,16-2)を埋蔵文化財調査事業団から資料として借用
- 4 本時の展開

学習活動	学習内容	・指導上の留意点
1. 外部講師紹介・資料紹介【5分】		・教員が事業団職員紹介 ・理事長が資料紹介
	栗橋宿を発掘することとなった経緯等を、当時の発掘状況写真などを用いながら説明	
2. 本時のめあての確認【3分】		・教員からの問いかけ
	資料から「当時の宿場町の様子」を探るとともに「現代の生活との繋がり」を考える。	
お題の提示		
	Q①歴史で学んだことと、今日の資料から、当時の埼玉の宿場町の様子はどんなだったのか、Q②1つの遺跡で、色々な産地の遺物(陶磁器等)が出土することから、どのような可能性が指摘できるか、Q③何故、土の下から遺物が発見されたのか。	
3. 資料の観察及び【15分】 グループ内意見交換		<ul style="list-style-type: none"> ・資料2キットを教室の前方2机上に用意し、班(6名)ごとにローテーションで資料を見たり触ったりしながら、課題を解決できるように、教員が支援する。(1つの机に5分程度とする。) ・待っている班は、事業団職員の支援を受け、教科書や発掘状況の画像なども見ながら江戸時代のおさらいを、お題についての考えを深める。 ・ワークシートにメモ欄を設け、大切なことを記入できるようにする。
4. グループの意見発表【5分】		・教員が児童を指名
5. 資料についての解説【10分】		・調査員が解説
	資料を調べると、栗橋という場所の特徴から、参勤交代などを背景に、「日光道中や利根川を利用した人やモノの移動(交易・交流・流通)が想定できる。対象地域も複数で広域である」という、当時の宿場町の様子が分かる。また、「栗橋宿は昔から災害に見舞われており、現代の防災対策の必要性にも繋がっている」ことが分かる。	
6. ふりかえり【5分】		・時間があれば、児童にふりかえりを発表させる。
7. 本時のまとめ【2分】		・教員からのまとめ
	「参勤交代などを背景に、中心地の江戸だけでなく、地元埼玉(久喜市栗橋)でも人々がしたたかに生活していたこと」、ハザードマップ(久喜市利根川エリア1・8)を改めて確認するなど「防災対策(第5学年で学習済)がいかに大切か」に繋げる。	
8. 埋蔵文化財調査事業団職員と挨拶交換		

第9図 栢間小学校の授業例



第 10 図 栢間小学校（オンライン）の授業風景(1)

ただいた。小澤教諭にとっても非常にインパクトがあったようであり、実際には収蔵施設には足を運ばない子供たちにも、そのインパクトを伝えていただけるであろうと確信した。

また、遺物を扱う際の注意事項や遺物のコンテナへの収納方法を習得していただくとともに、実際に遺物を手に取っていただきながら、その特徴などについて「研究者」である当事業団職員から情報を収集された。その後も、メールのやりとりをしながら、授業展開例の案を固めていった。

(2) 当日の大まかな流れ

授業の形態としては、展開例にあるように、「研究者」として調査部職員の村山をゲストティーチャーとし、担当教諭と藤田の3人によるチームティーチングの形で行った。学校側は図工室、事業団側は理事長室で藤田と村山が、Zoomを用いてオンラインで実施した。

本番授業前の1時間目は、カメラとマイクのテストと、進行についての簡単な打ち合わせをした。大まかな役割分担は、以下のとおりである。

小澤教諭は、授業の日当ての確認、遺物の取り扱いを含めた児童への指示等、全体の進行管理をおこなう。藤田は、ファシリテーター（案内役）として、発掘調査の経緯等を説明するとともに「お題」（考えてもらいたいポイント）の投げかけを行う。村山は最後に登場し、「お題」についての「研究者」としての考察を中心に解説をおこなう。

(3) 当日の様子

当日の授業について展開例（第9図）に沿い写真（第10・11図）で紹介したい。

【展開例1：外部講師紹介】

①藤田の自己紹介の後、整理室で仕事をしている村山「研究者」を紹介するとともに、整理作業の様子も少しだけ紹介した（実際には事前にビデオ撮影した映像を使用）。

【展開例2：資料紹介】

- ② 藤田が Zoom の画面共有機能を用いて栗橋宿跡を発掘調査することとなった経緯を説明。
- ③ 出土した遺物の整理作業の様子も紹介。

【展開例3：本時の目当ての確認】

- ④ 小澤教諭が事前に「お題」を板書。
 - Q1 当時の宿場の様子はどんな様子？
 - Q2 1つの遺跡から様々な産地の遺物……なぜ？
 - Q3 なぜ土の下から？

【展開例4：資料の観察】

- ⑤ 小澤教諭が遺物の産地を記載した付箋を準備。
- ⑥ 3つの班に分かれて5分毎にローテーション。
- ⑦ 3班中2班は、遺物を実際に手に取ってみる。一部分について「ざらざらしている」という感触の感想が出るなど、自然に子供たちの意見交換が始まる。小澤教諭がタイミングを見て「お題」や質問も投げかけ、子供たちの思考を深めるサポートをした。
- ⑧ 地図帳の「日本の歴史」のページを見ながら産地に関しても意見交換。
- ⑨ 3班中1班は、藤田の説明を受け、社会の教科書の復習や発掘調査状況の写真を見たりして……。
- ⑩ 「栗橋宿に何があったのか」考えを深める。

【展開例5：意見発表】

- ⑪ 小澤教諭が児童を指名して意見発表。
 - 子供たちは、ワークシート（第8図）も見ながら、今日の授業の振り返りをした。

【展開例6：資料についての解説】

- ⑫ 「研究者」が栗橋宿の謎を解説。

「栗橋宿における災害の歴史」と発掘調査の意義についても説明。



第11図 栢間小学校（オンライン）の授業風景(2)

(4) 学習効果

冒頭、「同じようなものが家には無いと思った人」と「研究者」が問いかけると、全員が挙手し、「古いものだ」ということは実感したようである。大人にとっては見慣れた江戸時代の食器も、子供たちにとっては見慣れないものであったようである。予想以上に「ほんもの」効果を発揮して、興味を惹く観察対象となったようだ。

児童の感想文(第12図)を見ると、江戸時代の暮らしが「今の文化や暮らしに深くかかわっている」ことを実感するとともに、「歴史についてしっかり勉強したい」という探究心にもつながったことが分かる。また、「研究者」の最後の解説にインパクトを受けた様子が分かり、この授業でも、「遺物」と「研究者」という2つの「ほんもの」が学習効果を高めたことが窺われる。

また、小澤教諭が遺物(陶磁器)の横に「産地を記入した付箋」を配置するとともに、地図帳も準備された。このことにより、学習指導要領が目指す第5学年の「資質・能力」に関する育成目標のうち「地図帳(中略)などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身に付ける」(註16)ことへの振り返りにもつながった。

(5) さらに期待できる学習効果

子供たちの感想文には「このことを家族や友達に教えたりしていきたい」との記述が散見された。授業の様子は、当日の午後、早速、「栢間小ニュース」として、学校のホームページにアップロードされた。このことにより、家族や学校応援団等の学校関係者との対話につながるきっかけとなり、さらなる学習効果が期待できるのではないだろうか。

5 資料活用事業の今後に向けて

(1) 教職員に向けたさらなる情報発信

以上、述べてきたように、「学習用キット」を

活用した授業は、子供たちの学びに資する、非常に効果的な内容を生み出すことができると考える。学習指導要領の目指す方向性からみても、少なくとも「学習用キット」と「研究者」という二つの「ほんもの」の組み合わせは「メッセージ授業」と遜色がない。

今後は、学習指導要領にも裏打ちされた効果を県教育局、県総合教育センター、市町村教育委員会の指導主事の方々を中心に実感していただけるような情報発信をしていく必要があると考える。そのためにも、埼玉県社会科教育研究会などを通じて、学校現場の先生方と連携を取りながら、「学習用キット」を活用した授業実践例の積み重ねをしていくことが大切であると考え(註17)。

(2) 「GIGA スクール構想」への対応

「学習用キット」を活用したオンライン授業は、全ての時代で実践可能と考えている。さらに、「土器」という生活用具を中心に据え、社会だけでなく、教科の枠組みを超えて教科横断的に学ぶことにより、子供たちの「生きる力」を育んでいくことができると考えている。

教科横断的に学べる体験学習としては、社会科見学などの学校行事がある。しかし、コロナ禍の中バスを出せないと、ある教育長が嘆かれていた。一方、「GIGA スクール構想」の実現に向けたハード面の整備には、拍車がかかっている。しかし、オンライン授業を積極的に実践している学校は、残念ながら少ない。また、肝心の内容は、まだまだ充実していない。

「GIGA スクール構想」により、子供たちが出かけなくても、学校に「学習用キット」とオンラインを通じた「研究者」の2つの「ほんもの」を届けることが可能になるかもしれない。もちろん、少なからず職員に負担がかかることから、実現のためには、一定の予算措置が必要になるが、費用対効果は大きいと考える。

今後は、関係者の御理解、特に学校現場におけ

る理解者を増やすことにより、「GIGA スクール構想」に対応した「学習用キット」活用の予算化を目指すことが、子供たちの学びの充実のために必要であると考えます。

(3) もう一つの「ほんもの」の活用と中高生

これまで、事業団の「ほんもの」として、「土器」と「研究者」を挙げてきたが、実は、もう一つ「ほんもの」がある。遺跡を発掘した調査記録を整理した「発掘調査報告書」である。この「発掘調査報告書」は考古学関係の専門家が基礎資料として活用してはいるが、一般県民はもちろん、学校の教育活動では、まず活用されることはない。

しかし、報告書には、地域の歴史から始まり、遺物が出土した住居跡の状況が詳細に記され、「研究者」の観察や所見も記されている。小学校では「発掘調査報告書」の活用のハードルは高いと考えるが、中学生や高校生レベル（註18）になれば、土器だけでなく、その背景となった「発掘調査報告書」を学びの素材とすることにより、さらに「研究者」の「ほんもの」の価値が増幅され、子供たちの学びの意欲につながるのではないかと考える。

(4) より多くの子供たちに「ほんもの」を

「メッセージ授業」の有用性について、そして、出土文化財活用事業を拡大する必要性を述べてきたが、当事業団は、この事業により利益を上げるわけではない。



今に伝わる歴史文化

ぼくは、くろり橋で発掘したお皿などを見て江戸時代に何かあったのかと興味を持って調べることができました。またお話を聞いて昔に火災があったお水などたくさんお皿などがくろり橋をおもったんだと思えました。そしてお皿など昔に何かあったのか武士のくろり橋はどうゆうものだったのか分かる大事な物が今に残されて行ったんだと分かりました。今回のことから宿場町はお皿などをかうことが出来るお店みたいな所で武士が参勤交代の際に立ちよっていたんだと思えました。今回の授業をやって参勤交代について宿場町について江戸時代について深く知ることができました。そして歴史が今の文化や暮らしに深く関係しているんだと授業をやって思いました。これからも歴史についてしっかり勉強したいと思います。



第12図 栢間小学校（オンライン）の感想文（2）

当事業団は、埋蔵文化財の保護思想の普及をし、本県文化の向上に寄与することなどを使命として、埼玉県的全額出資により設立された公益財団法人である。この使命を果たすために、最も効果的なのは、学校教育との連携による子供たちへの働きかけであると考えている。

まとめ

これまで、埼玉文が県教委の委託を受け、実施している普及事業の一例を紹介してきた。現在のような形で「メッセージ」、「学習用キット」の運用が開始されて約10年が経過する。そこで今後

は、これまでの経験を踏まえ、県教委とさらに連携し、授業内容の多様化やキットの組換え等の改善を図り、学校や担当教諭、教科担任等のニーズ

に対応していきたい。そして何より、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を推進させる原動力になればと考えている。

註

- 1 しかし、令和2年度以降、6年生はその間に公民的分野を履修することとなり、今年度は、7月に集中することが予測されていた。ところが、新型コロナウイルスの影響によって、予定が大きく変更することとなった。
- 2 本章は、令和2年度日本考古学協会総会「学校でなぜ旧石器は教えないのか」の発表要旨（堀内 2020）をもとに作成した。なお、同総会はコロナ禍のため開催されなかった。
- 3 埼玉県東南部の中川低地は、中世まで汽水域が広がり、人類の痕跡である遺跡は少ない。いっぽう、東部事務所管内の小中学校が、古代から教室へのメッセージへ寄せる関心は、圧倒的に高く、競争率が5倍を超えることも珍しくない。
- 4 久木幸雄 1977 によると、「おそらく彼らは、大学の正式の講義を聴く前の何年かを、文字の読み書きから初めて、初等教科書の学習で過ごしたらしい。読み書きの入門教材としては、万葉仮名四八字の「あめつち詞」や「たみに歌」「難波津」の和歌などが一般的に用いられ、平安末には「いろは歌」も出現している。初等教科書としては、『千字文』『蒙求』が知られている。」とあり、『千字文』は広く民間に普及していたようである。
- 5 通常 50 分の授業のところ、コロナ禍のため、40 分の授業となった。その結果、この地震を文献史料から考察することができなかった。通常ならば、まず、電子黒板に歴史史料として『類聚国史』の読み下し文を二つあげる。社会科教師は、生徒に朗読させ、この史料から分かったことを発表させる。発表に沿って田中が補足解説を行うという段取りである。

一つ目の史料は、列記された国名に房総半島南部の上総・安房国がなく、関東地方の内陸で起こった地震であったこと、山崩れや土石流が起り、洪水が発生したこと、多数の圧死者から夜に地震が発生したことなどが読み取れる。

また、二つ目の史料は、政府から地震の被害状況を把握するため使者が派遣されたこと、被害によって食

糧が与えられたこと、税金（租や調）の免除が行われたこと、建物の修理に国家の補助金が払われたこと、地震で死んだ人を手厚く葬ったことなど、地震被害に臨む政府の姿勢を読み取ることができる。

とくに「租」や「調」などの史料用語は、これまでの振り返りとなる。

まとめると、机上に並ぶ土器を使っていた人々は、天地をひっくり返すような震度5強を超える地震に襲われた。夜中のことで崩れる屋根の重みで多数が圧死したことであろう。地中から水と砂が湧き出し、シート状に広がっていくのは、さぞかし不気味なことだったはずである。

- 6 日本考古学協会 社会科・歴史教科書検討委員会 2019.5.19「歴史教科書を考える 第17号」
- 7 小学校学習指導要領（平成29年告示）第1章総則 第3 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
- 8 小学校学習指導要領（平成29年告示）第1章総則 第3 1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善(7)
- 9 東洋経済オンライン 親野智可等 更新日 2019年12月24日 <https://toyokeizai.net/articles/-/320626> (2021.01.6 入手)
伸びる子は「知識の杭」をたくさん打っている 本物体験によってできる「学習のレディネス」
- 10 小学校学習指導要領（平成29年告示）第2章第2節社会第2 各学年の目標及び内容〔第6学年〕1 目標
- 11 小学校学習指導要領（平成29年告示）第2章第2節社会第2 各学年の目標及び内容〔第6学年〕2 内容(2)イ（ア）
- 12 小学校学習指導要領（平成29年告示）第2章第2節社会第2 各学年の目標及び内容〔第6学年〕3 内容の取扱い(2)キ
- 13 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編 110 頁
- 14 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編 110 頁

- 15 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）第 2 章第 2 節社会第 2 各学年の目標及び内容〔第 6 学年〕 2 内容(2)イ
- 16 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）第 2 章第 2 節社会第 2 各学年の目標及び内容〔第 5 学年〕 1 目標(1)
- 17 本稿脱稿後の 2021 年 2 月 16 日、当事業団の本部が置かれている埼玉県文化財収蔵施設において、埼玉県社会科教育研究会の現地研修会開催が予定されて

いる。

- 18 本稿では詳細には紹介しないが、令和 2 年度、工業高校とコラボさせていただく機会があり、高校生たちが、土器と出会ってパズルを作ったり、土偶と出会ってレプリカを作ったりと、様々な実践をしてくれた。この経験から、高校生が「報告書」と出会ったら、大人には想像もつかない実践が生まれるのではないかと考える（埼玉県立大宮工業高校ホームページ、埼玉県立川越工業高校ホームページ参照）。

参考文献

- 結城陸郎 1967 「書評、尾形裕康著『我国における千字文の教育史的研究』」『教育学研究』第 34 巻第 1 号 日本教育学会
- 上原真人ほか編 2006 『列島の古代史』6 言語と文字 岩波書店
- 木村政伸 2014 「前近代日本における識字率推定をめぐる方法論的検討」『識字と学びの社会史—日本におけるリテラシーの諸相—』大戸安弘・八鍬友広編 思文閣出版
- 鈴木理恵 2014 「「一文不通」の平安貴族」『識字と学びの社会史—日本におけるリテラシーの諸相—』大戸安弘・八鍬友広編 思文閣出版
- 鈴木理恵 2018 「第 1 章第 1 節 古代中世の教育史」『教育史研究の最前線Ⅱ』創立 60 周年記念 教育史学会編 六花出版
- 高田時雄編 2009 『漢字文化と三千年』臨川書店
- 東野治之 1983 『日本古代木簡の研究』塙書房
- 久木幸雄 1977 「早稲田のあげまき」久木幸雄編『夜明けの子ども』日本子どもの歴史 1 第一法規出版株式会社
- 平川南編 2004～2006 『文字と古代日本』吉川弘文館
- Lynn Hunt 著（長谷川貴彦・訳）2020 『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店
- 日本考古学協会 社会科・歴史教科書検討委員会 2019.5.19 「歴史教科書を考える 第 17 号」
- 親野智可等 2019 年 12 月 24 日更新「伸びる子は『知識の杭』をたくさん打っている」東洋経済オンライン <https://toyokeizai.net/articles/-/320626>（2021 年 1 月 7 日入手）
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編
- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領（平成 20 年告示）
- 文部科学省 2008 中学校学習指導要領（平成 20 年告示）

研究紀要 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社